

「ふたつの的を射る」

ガラテヤの信徒への手紙 5 章 13～15 節、22～24 節

学校法人聖学院 理事長・大学学長 清水正之

夏目漱石の『草枕』の冒頭の一節を、皆さん覚えていますか。

「智に働けば角が立つ。情に棹させば流される」という言葉ですね。つまり分別、理性だけで他人と関わっていくといさかいが起こる。かといって人間の情を受けとめようとすると、人情に流されてしまうという、よくある私たちの日常の在り方を、夏目漱石が非常に上手く表現した一節ですので大変有名であります。

こういう葛藤や分裂は他人との関わりの中で、しばしば日常的に起こることで、心が乱れます。私自身もしばしば、うらみ、つらみ、悩み、憤り、やけ、色々な感情に揺れます。そうした感情にどう向き合ったら良いかをよく考えもします。なぜそのような感情の流れに、私たちは身をさらされるのかということを一且考えてみることは重要だと思います。

数日前に新聞の投書欄に出ていた女性教師は、「自分は本来の自分らしさと大人らしい人との関わりの兼ね合いを図りたいと思って生活しているが、なかなか難しい日々を送っている。何とかいい兼ね合いを見つけていきたい。」と書いていました。また、競歩というスポーツで優勝した選手の記事がありました。私も時々学校にくる途中など競歩の真似をしてみることがありますが、その選手がこんなふうに書いていました。「練習をする中で、自分軸を立てることが出来た。それでぐっと伸びた。それによって周りの人との関係が変わり、一層競技で成果が出るようになった。」つまり前者の場合は、自分らしさということと、人とどう関わっていくか、の間でのとまどいを述べており、後者の場合は、人との関わりが自分軸を立てることで、非常に豊かに広がっていった。それが今の成果につながっているのだという思いを述べています。

私たちが日々持つうらみやつらみや憤りや悩み、その大半は人との関わりから生じているということは確かです。すべての関わり、親との関わり、友人との関わり、知人との関わり。関わりの中で私たちは、うらみやつらみや憤りや悔しさや憤激を時に持ちます。さあ、どうしたらいいんだろう。先程の投書の女性のように、自分を立てたい、自分を本来的な自分にしたい。だけど同時に他者との関係を作りたいというのが、おそらく私たちのひとつの答えだと思います。もちろん、いつそ一人になりたい、他人との関係を断ちたいと思うこともあると思います。実際冒頭でふれた『草枕』という本は、人との関係が面倒だから、山の中に入って自然の美と共に暮らそうと考える主人公を中心とした小説です。その主人公は結局は人間の世界へ戻らしかないとあってあの小説は終わります。さて問題は聖書、キリスト教はどうなんだろうということですが。

この夏、わたしは戦後ひとつの著作で非常に世界的にも有名になった北森嘉蔵という神学者のそ

の著作『神の痛みの神学』を読みなおしていました。神の痛みそのものが人間への愛になっている理解に基づいた聖書解釈と神学を立てています。北森氏が非常に衝撃を受けたのは旧約聖書のエレミヤ書でした。エレミヤというのは三大預言者と言われているイスラエルの古代の預言者です。彼は、イスラエルの半分が敵によって滅ぼされた時に、神の意志に反してこのままイスラエルの民が生きると全部を失うということを預言し、そのために迫害や苦難を受けた預言者ですが、要するに神への信仰に立ち返らないと、古代のイスラエルが滅びてしまうという預言を繰り返し、人々から咎めを受けたわけです。こうした事態になってしまった人間たちの所業を、神が怒るわけですが、神がエレミヤに語るのは、愛するイスラエルよ、私に向き合う子どもたちよ、私はお前たちのことを思わないことがない、これゆえに私は、イスラエルの民のために腸が痛むのだ、という内容です。神が、私は必ずイスラエルの民を憐れむ、情けをかける、憐憫を施す、その所業に怒っているために腸が痛む、その痛みを通してイスラエルの民を憐れむのだ、と語っているところに北森氏はひとつの啓示と衝撃を受けたというわけです。今の口語訳、新共同訳にはないのですが、原語であるヘブライ語や日本語文語訳聖書では「はらわた」という言葉で訳されています。中国語でも「断腸の思い」、腸が断ち切れるほどの思いという言い方があります。心の痛みを表すのにぴったりという言葉です。神様もはらわたが痛くなったわけです。それが同時にイスラエルへの深い愛情になっている。北森氏はそこに着眼して『神の痛みの神学』、つまり神が痛む、神の痛みがそのまま人間への愛に転化しているとしてひとつの神学の体系を作るわけです。

この本の中に、キリスト教を信じることはふたつの的を一本の矢で射なければならないという言葉があります。北森氏が作った言葉かどうかは分かりませんが、ふたつの的を一本の矢で射ることが求められている。それは要するに神を愛すること、神に愛されることというひとつの軸です。そのことと人を愛するというふたつめの軸がある。その軸の交点にいるわたしたち人間は、神を愛することと人を愛するという、ふたつの的を一本の矢で射ることをもとめられている、これがキリスト教の説く愛なのだということです。先程の心が痛むということと、人間を深く愛するという気持ちをふたつ持っている神のありかたを擬人化したような形なのかなと思うのですが、確かに聖書の至る所で限りなく神を愛することを語っていますと同時に人を愛するということを黄金律として常に説いている。二つの的を一本の矢で射ることを常に聖書は、私たちに求めているということがわかります。

今日読んだ御言葉には、愛は律法を完成するとあります。さらに、人を愛することの中には敵さえ愛するということをふくみ、また、神を愛し、神にふさわしい人になるということが、本来の人間の在り方だということを、聖書は説いています。つまり神を愛し神に愛されることと人を愛することを共になせ。ということが聖書の神髄だと思います。新約聖書のガラテヤ人への手紙には、愛、喜び、寛容、親切、善意、忠実、柔和、節制、これが愛の成果だと述べられている。わたしたちは、着実に自分の背負っている重荷を背負いつつ、まさに誠実に生きていくことこそが、愛の成果、すなわち、ふたつの的を射るということの実りを、平和、寛容、親切、善意、忠実、柔和、節制という形で手にし身につけ、私たちの生き方そのものになっていくということです。ふたつの的を射るという生き方をもって、その身を養い、魂を養い、霊を養っていくことが大切なのではないかと思います。お祈りを捧げます。

われらの救い主、神様。今日こうして新学期が始まった中で、私たちはそれぞれに新たな思いをもって、大学の務め、大学での私たちの義務を果たすべく、キャンパスに集ってまいりました。

こうして新学期の本当の日々を静かな祈り時を持つ機会ができますことを心から感謝いたします。

この祈りを通して私たちのこれからの歩みが、あなたによって励まされ、慰められ、あなたの教えを日々の行い、思いの中で実践し、私たちがあなたにふさわしい器となれますことを見守っていて下さい。今、ここに集った学生の皆さん、教職員の皆さんひとりひとりに、そしてまたキャンパスに集う仲間たちの上に、神の守り、恵み、慰めがあり、それぞれの健康が守られ、私たちの本分を私たちが忠実に柔和に愛に満ちて手にすることができますよう見守っていて下さい。このささやかな祈りを、学期のはじめにイエスキリストの御名を通して御前に捧げます。

アーメン

2019年10月2日 聖学院大学 全学礼拝シリーズ礼拝「心に響く聖書の言葉」